vinetur

# シャンパーニュ、殺菌剤使用を最大90％削減できるブドウ品種「Orellis」の試験へ

初期調査でべと病への耐性と高い酸が確認されたOrellis。シャンパーニュのアペラシオン団体が導入に向けた書類を準備する

2026年11月24日（火）



シャンパーニュのアペラシオン団体は、耐病性ブドウ品種Orellisを地域で活用できるか検討するため、試験に向けた書類を準備している。生産者は、この新しい白ブドウ品種がベースワインの酸を保ちながら、殺菌剤の使用を大幅に減らせるかどうかを見極めようとしている。

Réussir Vigneが11月23日（月）に公表した報告によると、初期調査の結果、Orellisはべと病に強い耐性を示し、うどんこ病には完全な耐性を示した。また、しっかりした酸を備えたアロマ豊かな

白ワインを生み出すという。スパークリングワインの生産に酸が不可欠で、栽培者が病害虫防除のための農薬使用削減を求められているシャンパーニュで、この特性が注目を集めている。

Orellisは、フランスの研究機関Inraeが主導するResDur 3育種プログラムで開発された6品種のうちの一つだ。報告によると、この品種はべと病に対する耐性因子を2つ、うどんこ病に対する耐性因子を3つ持つ。Inrae Colmarの研究エンジニア、Vincent Dumas氏は、べと病に対して非常に高い耐性があり、うどんこ病には完全な耐性を備えていると述べた。

ただし、この品種が主要な病害すべてに完全な耐性を持つわけではない。Réussir Vigneによると、Orellisは黒腐病に対する耐性因子Rgb1とRgb3も持つものの、黒腐病への防除効果は部分的にとどまり、それだけでは不十分だ。Dumas氏によれば、感染リスクが高い条件では、開花期前後に時期を合わせて2回、殺菌剤による防除が必要となる。また、この処置は、べと病とうどんこ病に対する耐性因子の長期的な有効性を保つうえでも役立つという。

こうした制約があるものの、報告によれば、感受性品種と比べて殺菌剤の使用を80％から90％削減できると推定されている。商業用ブドウ畑でもこの数値が確認されれば、スパークリングワインに適した酸を保ちながら防除の必要性を減らせることから、シャンパーニュ以外の地域にとっても重要な品種となる可能性がある。病害の圧力や温暖化する栽培環境に対応するため、ブドウ品種の構成を見直す他のワイン産地にとって、指標となる可能性もある。

シャンパーニュの関心は、なお慎重な段階にある。Comité Champagneで植物材料・生産部門を統括するGéraldine Uriel氏はRéussir Vigneに対し、これまでのところOrellisの栽培特性は有望に見えると語った。これを受け、ODG Champagneは地域の適応策の一環として、アペラシオン規定への追加を申請するための書類を準備しているという。次の段階では、シャンパーニュのアペラシオンに固有の実際の生産条件下でさらにデータを集め、品種の栽培面と醸造面の可能性について、時間をかけて理解を深めるとした。

Réussir Vigneが引用したVATE試験によると、2021年から2025年にシャンパーニュで実施された試験では、Orellisの生育サイクルは地域の主要な白ブドウ品種であるChardonnayに近い一方、いくつかの違いも見られた。平均的な発芽時期はChardonnayより5日遅く、成熟期は2日遅かった。霜害リスクの高い地域では、発芽が遅いことが利点となり得る。一方、成熟のわずかな遅れは、シャンパーニュの既存の生産暦の中でも栽培できる可能性を示している。

この品種は樹勢が中程度で、収量はChardonnayをわずかに上回るとされる。Réussir Vigneによると、試験では対照品種より約10％多く収穫できた。房は中程度から大きめで、果粒は中くらいの大きさ。果皮も厚く、灰色かび病への高い耐性に寄与している。

醸造面では、Orellisは白ワイン向けの品種とみられる。報告によると、果実や花の香りがあり、骨格のある味わいと高い酸を備えたアロマ豊かな白ワインを生み出す。VATE試験では、成熟時の糖度はChardonnayと同程度で、果粒の酸度は同等からやや高めだった。Dumas氏は、この酸がシャンパーニュの生産者にとってベースワイン用に魅力的だと述べる一方、アロマ豊かなスティル白ワインの生産にも適しているようだと語った。

こうした特性を持つOrellisは、グラスの中の品質を損なわずに、べと病やうどんこ病にかかりにくいブドウ品種を育種するフランスと欧州の幅広い取り組みの一端を担う。報告によると、この品

種はInraeとAgroscopeが開発し、2026年に取得された。複数の耐性系統を交配したもので、耐性は多遺伝子型の仕組みに基づく。つまり、単一の保護要因ではなく複数の遺伝子に依存している。一般に、これは耐性の持続性を高める手段とみられているが、研究者は耐性が崩れるのを防ぐため、慎重なブドウ畑管理が依然として必要だと強調している。

現時点で、Orellisの商業栽培はごく初期の段階にある。Réussir Vigneによると、欧州での栽培面積は1ヘクタール未満で、フランスでの試験栽培に限られている。この品種は白ブドウに分類され、生産性は高い可能性があるとされ、フランスのブドウ苗木供給ネットワークを通じて流通している。クローン番号は1420。

今回シャンパーニュで検討が進む背景には、フランス各地のワイン産地が、病害の圧力や気象パターンの変化、環境面で高まる要請への対応につながる新たなブドウ品種を試験している状況がある。そうした中でOrellisが際立つのは、スパークリングワイン生産者にとって見過ごせない特性を兼ね備えているためだ。果実のフレッシュさを保ちながら、殺菌剤の使用を大幅に減らせる可能性がある。試験で得られた有望な結果から、シャンパーニュのブドウ畑に定着する品種へと進めるかどうかは、アペラシオン団体がこれから実施しようとしている実地評価にかかっている。